

割を果たしているので、日系人農業についてさらなる事例研究の蓄積が必要である。また、この事例研究を踏まえて、まだ必ずしも明らかになっていないカリフォルニア農業と農業地域の地域の特徴、農業地域区分などについて、地域研究が待たれるところである。

本書は、著者がカリフォルニア大学・パークリー校への長期留学時の研究成果としてまとめられた労作である。ぜひ、一読願えば幸いである。

(水嶋 一雄)

西村 幸夫 著：

「歴史を生かしたまちづくり——英国シビック・デザイン運動から——」

古今書院 1993年8月

A 5判 170ページ 2,200円

本書のサブタイトルとなっているシビック・デザインという用語は、まだ日本ではなじみが薄いのではなかろうか。イギリスでは古くから地域の環境保全運動が盛んである。古い都市景観や史跡、自然景観などの保全のためにナショナルトラストが組織されており、また各地の都市の生活環境の保全と改善を目的とした市民の自発的運動組織としてローカル・アメニティ・ソサエティがある。特定の物件の保全だけでなく、都市の生活環境を全体的に考え、その保全と改善を目指して市民みずから行なう町づくり運動がシビック・デザイン運動であり、このような各地の団体の全国的組織がシビック・トラストであって、1957年に設立された。

本書はイギリスの各地で展開されている町づくり運動について、著者がみずから現地を訪問し、関係者にインタビューし、その実態に触れた記録であるとともに、イギリスにおける町づくり運動の歴史やその特徴が全国的な規模で把握できるようにまとめられている。

本書は次の7章から成る。

1. 英国シビック・デザイン運動のあゆみ
2. エセックス州ハリッジ／多様な活動、ゆるやかな連繋
3. デボン州シドモス／英国最古のローカル・アメニティ・ソサエティ
4. ノーフォーク州ノリッジ／オグドンおばさんの休暇
5. ダービーシャー州ワークスワース／再生した

過疎のまち

6. シュロップシャー州アイアンブリッジ／環境の教育力

7. イギリスから日本のまちづくりを展望する

第1章は表題の通り、シビック・デザイン運動の略史であるが、町づくりとか都市計画といわれるものが、専門家主導で行なわれてきた時代から脱して、市民が地方行政当局と協力して町づくりの基本方針や具体案の検討に参画するようになった過程が述べられる。とくにイギリスにおけるボランティア観がどのようにして成立したのかというプロセスや、ボランティア活動を支える公的な補助金の制度に関する記述は貴重である。

第2章から第6章までは、著者が実際に探訪した町づくり運動についての具体例である。いずれも一般の日本人にはなじみの薄い町が多いが、各章の冒頭のカットにイギリスのなかでの町の位置を示す略図が掲げられている。ノリッジのように町そのものが人口12万人という中都市であり、歴史的にも著名なものや、古くから港町として繁栄していたハリッジのような例もあるが、ワークスワースとなると、すぐに位置を指摘できる日本人は極めて少ないのではなかろうか。ここで述べられていることは、それぞれの町のソサエティがどのようにして町づくりを進めてきたかという物語であり、すべてがうまくいったものばかりではない。また、ソサエティ運営と町づくり運動の中心となってボランティア活動を長年にわたって続けている人物のキャラクターが生き生きと描かれている。

何の変哲もないような小さな町や村にも、それぞれ固有の環境があり、固有の歴史がある。多くのソサエティの活動は、市民たちの自分の町に対する関心からはじまった。それは郷土史であったり、博物学、建築、民芸であったりする。たとえば、港町ハリッジのソサエティは、博物学、建築、郷土史、海事博物館運営、遊歩道、樹木、アクション(保存キャンペーンや募金活動)の7グループより成っていて、これらのグループが連繋して一つの町のソサエティをつくっている。このような関心のなかで、歴史的建造物や町並みなどの歴史的環境の保全や修復がとりあげられる。また、こわれたままの公衆電話を調査して、その結果を電話会社に知らせ、改善を要求するといった地道な生活環境の改善もソサエティは手がけていることが述べられる。

地域の環境教育センターとして機能しているヘリテージ・センター、あるいは郷土史博物館についても、本書はいくつかの事例を提供してくれる。産業革命発祥の地の一つであり、世界最初の鉄橋が現存するアイアンブリッジの町は、セバーン川に架かるこの鉄橋の橋詰に位置する。1963年、この町の北方にテルフォードと名付けられたニュータウンが建設され、これに伴う開発によって産業革命の遺構が破壊の危機に陥った時、ニュータウン開発公社が中心となって、アイアンブリッジ峡谷博物館トラストが1967年に設立された。このトラストは、鉄、陶器、タイルの各博物館、および当時の建築物を移築やレプリカによって一つの町並みに再現した野外博物館、その他、ビジター・センターや研究教育センターなどから構成されているが、それは本格的な環境教育の場としての整備であったといえる。そして、3,000人のメンバーがアイアンブリッジ峡谷博物館友の会を組織して、ボランティアとして支援活動をしている。

本書には日本において現在展開されている歴史的環境の保全にかかわる具体例がところどころに顔を出し、イギリスの場合と対比されている。著者が日本における歴史的環境の保全を中心とした町づくりの理論的リーダーの一人であり、また実際に多くの町づくり運動にかかわっているだけに、読ませる部分である。

そして、最後の第7章において、行政主導型になりやすい日本の町づくりにいくつかの提案をしている。お役所の情報公開をもっと積極的に進め、かつ役所内部のセクショナリズムの排除などが大切であることを指摘したのち、著者は町づくり運動の効果的推進のために、法人格をもった独立セクターの構想に触れる。資産を保有し、寄付金受け入れにあたっての免税権をもつためには法人化は不可欠であり、日本における公益法人のきびしすぎる認定や、主務官庁の枠内でしか活動できないといった現行のあり

方にも、町づくり運動の活性化を阻害する要因が潜んでいることが指摘される。広い視野から世界各地の実例を研究している著者の意見だけに、傾聴すべきものが多々含まれていると思う。

実は評者自身も文部省在外研究員としてイギリス滞在中に、いくつかの町の歴史的環境保全の実態を見学する機会があった。とくに本書にも出てくるノリッジのマグダレン通りの環境保全については、うまくいった部分、実現できなかった部分などを現地に見聞しているだけに、ソサエティの活動状況を本書で知り、興味深かった。

ノリッジの場合、歴史的環境の破壊のきっかけとなったのは高速道路の建設であるが、多くの小都市で問題となるのはスーパーマーケットの建設である。イギリスでいうスーパーマーケットは、都市計画のなかでつくられる大型店であり、全国的な量販店やデパートをキーテナントとして、これに地元の小売店などがテナントとして加わる。便利な町の中心部（歴史的建造物が最も集中している）近くに立地することが多いため、どうしても歴史的環境の破壊が多発する。本書でもシドモスのソサエティがスーパーマーケット建設計画を阻止した事例が述べられているが、現実には阻止できずに環境破壊を招いてしまった例の方が多いと思う。本書でとりあげたソサエティは優等生的なものばかりであるが、イギリスといえどもうまくいった例ばかりではないのである。

日本でも近年、市民からの盛りあがりを基盤に据えた町づくり運動が各地でみられるようになった。本書はこのような動きを支援する有力な情報や教訓を提示しているといえよう。自分の住んでいる町の歴史や伝統を総合的にみることに対する関心が日本ではまだまだ稀薄のように思われるが、この種の関心を高める努力が地理学徒にも強く要求されているのではなかろうか。

(青木 栄一)